

ヨハネの手紙 第一

「救いの確信を得る喜び」

2016 年 聖書フォーラムキャンプ（御殿場）

基調メッセージ



中川健一

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ

ヨハネの手紙 第一

中川健一

イントロダクション

1. 文脈の重要性

- (1) 前後の文脈、その書全体の文脈
- (2) 聖書全体の中でのその書の文脈
- (3) 歴史的文脈

2. この書簡に関して

(1) 著者

- ①差出人の名前も、受取人の名前もない。
- ②伝統的に、ⅠヨハからⅢヨハまでの3つの書簡はヨハネによるとされている。
- ③内容と文学スタイルにおいてヨハネの福音書とよく似ている。
 - *「主が愛された弟子」(ヨハ21:20)
 - *「もうひとりの弟子」(ヨハ18:15)
- ④ヨハネは使徒たちの中では最年少で、最も長生きをした。
- ⑤紀元60年代になると迫害が激しくなった。
- ⑥使徒たちは、遅くとも68年までにはエルサレムを脱出していたと思われる。
- ⑦ヨハネはエペソに逃れ、そこで奉仕活動を続けた。
- ⑧この書簡は、80年代後半にアジアの諸教会に宛てて書かれたものと思われる。
- ⑨特定の教会に宛てたものではないので、「共同書簡」と定義される。

(2) 執筆の背景

- ①ギリシア哲学から派生したグノーシス主義
 - *この教えを信奉する者たちは、使徒たちとの交わりから離れて行った。
 - *霊肉二元論。霊のみを善なるものとし、肉体や物質を悪なるものと見なす。
 - *その結果、キリストの受肉を否定するようになった。
- ②ケリントスという人物が提唱した仮現論
 - *これはグノーシス主義から派生したもの。
 - *イエスが洗礼を受けた時にキリストが鳩の形をして彼の上に下った。

*十字架上の死の前にキリストは彼から去った。

*苦しんだのはイエスという人物であって、キリストは受難とは関係がない。

③以上の2つの教えは、ともにキリストの受肉を否定している。

*三位一体論、特にキリスト論が間違っている。

*キリスト論がおかしくなると、救済論もおかしくなる。

④ヨハネは、異端による悪影響を取り除くために、この書簡を書いた。

3. アウトライン

プロローグ (1:1~4)

1. 福音の歴史性 (1:1~2)
2. 喜びが全きものとなるため (1:3~4)

I. 光の中を歩むことの祝福 (1:5~2:2)

1. 罪は神との断絶をもたらす (1:5~7)
2. 罪は信者の性質の中に潜む (1:8)
3. 罪の赦しを受ける道がある (1:9~2:2)

II. 救いの確認 (2:3~29)

1. 従順によるテスト (2:3~6)
2. 兄弟愛によるテスト (2:7~11)
3. 挿入句としての説明 (2:12~14)
4. 霊的戦いによるテスト (2:15~17)
5. 教理によるテスト (2:18~27)
6. 実践によるテスト (2:28~29)

III. 愛に留まることによる確信 (3:1~4:21)

1. 聖い歩みによる確信 (3:1~10)
2. 兄弟愛による確信 (3:11~18)
3. 心の状態による確信 (3:19~24)
4. 教理による確信 (4:1~6)
5. 愛の関係による確信 (4:7~12)
6. 教理による確信 (4:13~21)

IV. まとめ (5:1~21)

1. 救いの確信 (5:1~5)
2. 救いを証しするもの (5:6~13)
3. 確信と答えられた祈り (5:14~17)
4. 体験的知識 (5:18~21)

プロローグ (1:1~4)

1. 福音の歴史性 (1:1~2)

「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、一このいのちが現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現された永遠のいのちです。」(1~2 節)

- (1) 「私たち」とは使徒たち（イエスの公生涯を目撃した信者たちも含む）のこと。
- (2) ヨハネは、使徒集団を代表して、イエスとの交わりに入るように読者を招く。
- (3) 「いのちのことば」であるお方は「初めからあったもの」。
 - ①永遠の昔から存在していた神である（ヨハ8:58）。
 - ②そのお方が人となられた（ヨハ1:14）。
- (4) ヨハネはそのお方に実際に触れた経験がある。
- (5) この証言は、グノーシス主義の教えを否定するためのものである。

2. 喜びが全きものとなるため (1:3~4)

「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。…私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです」(3~4 節)

- (1) ここで重要なことは、「私たち」が使徒たちを指していることを認識すること。
- (2) グノーシス主義者たちは、使徒たちとの交わりから離れて行った。
 - ①それによって異端であることを自ら証明した。
- (3) 使徒たちはイエスを信じて新生体験をし、御父と御子との交わりに入った。
- (4) 同じ信仰によって使徒たちとの交わりに入る者は、御父と御子との交わりに入る。
 - ①彼らが死んで以降は、その教えを守ることが「使徒たちとの交わりに入ること」。
- (5) 「私たちの喜びが全きものとなるためです」
 - ①読者が御父と御子との交わりの中に導かれるなら、使徒たちの喜びとなる。
 - ②古い写本の中には「あなたがたの喜び」となっているものがある。

* 真の喜びは御父と御子との交わりの結果与えられるものだという意味になる。

Ⅰ. 光の中を歩むことの祝福 (1:5~2:2)

1. 罪は神との断絶をもたらす (1:5~7)

「神は光であって、神のうちには暗いところがない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです」(1:5)

- (1) ヨハネはキリストから聞いたことを読者に伝える。
- (2) 父なる神の光は、人間の罪の深さを暴き出す。
- (3) その光は、神の本質と特徴を啓示する。
- (4) ヨハネは、その福音書の中でも「光」という言葉を頻繁に用いている。
 - ①共観福音書と比較すると、その多さは際立っている。
 - ②ヨハネにとっては、光とは、神の聖さであり、神の啓示でもある。
 - ③それと対極にあるのが、誤った教えであり、放縦な生き方である。
 - ④そのことをヨハネは、「やみ」と呼んでいる。
 - ⑤異端的教えを信奉する者は、「やみ」の中を歩んでいる。
- (5) ヨハネの福音書の中では、イエス・キリストは光である。

「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった」(ヨハ1:4~5)

「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた」(ヨハ1:9) (その他、ヨハ3:19~21、8:12、9:5、12:35~36、46 など参照)

「もし私たちが、神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません」(1:6)

- (1) この聖句は、グノーシス主義者への批判になっている。
 - ①彼らは、自分たちは神と交わりがある、神から特別な啓明(イルミネーション)を受けたと豪語していたが、神の性質(光)を反映するような歩みをしていない。
 - ②彼らは、使徒たち(真理の証言者たち)から分離し、墮落した生活を始めた。
- (2) ユダヤ人たちは、イエスがメシアであることを受け入れることができなかった。
 - ①その理由は、自らの宗教的確信(ラビ的ユダヤ教)に固執したから(マタ6:23)。
- (3) グノーシス主義者たちも自らの霊的体験に固執し、使徒たちの教えから離れた。

「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます」(1:7)

- (1) 神との交わりがある者は、光の中を歩むようになる。
- (2) 光の中を歩んでいる者は、神の子どもたちとの交わりに入り、それを楽しむ。
- (3) そうでない者は、その交わりから離れて行く。
- (4) グノーシス主義者たちは、信者の交わりから離れて行った。
- (5) 神との交わりがあると言いながら、信者の交わりから離れて行く者は、真理に立っていない。
- (6) 光の中を歩む者は、あらゆる罪からの清めを体験するようになる。
- (7) その清めは、御子イエスの血による清めである。
 - ①イエスの生活を手本とすることや、空想などによって、清められるのではない。
 - ②現実に受肉したキリストの血によって、清められるのである。

③この箇所も、イエスの受肉を否定するグノーシス主義への反論となっている。

2. 罪は信者の性質の中に潜む（1：8）

「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません」（1：8）

- (1) グノーシス主義者たちは、「自分たちには罪はない」と主張していた。
 - ①彼らは、キリストが罪を取り除いてくださった、自分たちは「より高い知識」によって罪の領域から上げられたと考えていた。
 - ②また、肉体を悪用しても、善である霊に影響が及ぶことはないと教えていた。
- (2) ヨハネはその主張を一蹴する。
 - ①私たちもまた、自分を欺いてはならない。
 - ②クリスチャンになっても、罪の性質が完全に取り除かれるまでは、私たちはさまざまな罪を犯す。
 - ③例話：入浴して体全体が清くなった人。

＊いくら体全体が清くなっても、外から家に帰ってくると足を洗う必要がある。

「イエスは彼に言われた。『水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません』」（ヨハ13：10）
- (3) 真の信者は、自分の内に肉なる性質（古い性質）と霊なる性質（新しい性質）がともに宿っていることを認識している。また、肉なる性質に従って歩むなら、罪の束縛に陥ることも知っている（ロマ7：14～25）。
- (4) 真の信者は、自分に罪があることと、その罪を神が清めてくださることとを、ともに信じる。

3. 罪の赦しを受ける道がある（1：9～2：2）

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（1：9）

- (1) 自分の罪を告白すること。
- (2) ここでの「罪」という言葉は、複数形になっている（ハマルティア）。
 - ①日常生活で犯す罪を、ひとつひとつ具体的に告白すること。
 - ②この告白は神に対するもの。
 - ③もし誰かを傷つけた場合は、その相手に対しても告白する必要がある。
- (3) 神はご自身の約束に忠実なお方（真実で正しい方）である。
 - ①神は、その罪を赦し、すべての悪から私たちを清めてくださる。
 - ②「その罪を赦し」と「すべての悪から私たちを清めてくださいます」は同じ。
- (4) 神が私たちの罪を赦して下さるのは、神の義に基づいたこと。
 - ①御子イエスの血が流されたので、私たちの罪の代価が支払われた。

②これによって、神の義は満たされた。

「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません」(1:10)

- (1) 「罪を犯していない」：過去においていかなる罪も犯したことがないという意味。
- (2) これは、神のことばの教えとは真っ向からぶつかる。
- (3) そう主張する人は、神を冒涇する人である。神を偽り者とするから。
- (4) そういう人の内には、神のことば（真理）はとどまっていない。

「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです」(2:1)

- (1) 「私の子どもたち」とは、年老いた牧者から若い信者たちへの愛の呼びかけ。
- (2) 「これらのこと」とは、1章に出て来た内容。
 - ①父なる神が光であること
 - ②神との交わりを持つ人は光の中を歩み他の信者との交わりを持つこと
 - ③神との交わりを維持するためには日々の罪の告白が必要であること
- (3) ヨハネは、読者が罪を犯さないようになるために、この手紙を書いている。
 - ①と言っても、絶対に罪を犯さなくなるという意味ではない。
 - ②習慣的な罪から解放されるということ。
 - ③イエスを信じた時から、聖霊が私たちの心に宿ってくださる。
 - ④聖霊は、私たちの願い、興味、行動などを変え、イエスの似姿に変えてくださる。
 - ⑤人はその弱さのゆえに、信者になってからでも罪を犯す可能性を持っている。
 - ⑥もし罪を犯した場合は、父なる神様の前で弁護してくださる方がおられる。
 - ⑦直ちにその罪を告白すればよい。
 - ⑧その弁護士とは「義なるイエス・キリスト」である。
 - *キリストは律法の要求をすべて満たし、私たちの身代わりとして死なれた。
 - *キリストが復活したことは、父なる神がその贖罪の死を受け入れ、キリストを義と宣言されたということ。
 - *そのイエスは今、私たちのために執りなしをしてくださる。

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。…死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです」(ロマ8:33～34)

「この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——なだめの供え物なのです」(2:2)

- (1) 「なだめの供え物」は、新共同訳では「罪を償ういけにえ」と訳されている。

- (2) この聖句は、イエスが私たちの代わりに死んでくださったので、イエスを救い主と信じる者は誰でも救われるということを教えている（ロマ3:25 参照）。
- (3) イエスだけが唯一の救いの道である。

II. 救いの確認 (2:3~29)

1. 従順によるテスト (2:3~6)

「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります」(2:3)

- (1) 神の命令に対する従順こそ、キリストに属していることの明らかな証明である。
- (2) もしキリストに従っていないなら、その人はキリストに属していないし、キリストを愛してもいない。

「神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります」(2:4~5)

- (1) 「神を知っている」と言っているのは、グノーシス主義者たち。
- (2) 彼らはそう主張しながら、神の命令を守っていない。
- (3) そのような矛盾した生き方は、偽り者の生き方である。
- (4) 彼らは、真理からは遠く離れている。
- (5) 神の命令を守っていることと、神を知っていることはイコールである。
- (6) 神を愛するとは、みことばを守ることである。
- (7) 律法的にならないで神の命令を守る方法は、一つしかない。愛で応答すること。
- (8) 出エジプト記にある十戒も、愛の実践を行なう時にすべて全うされる。
- (9) みことばを守れば守るほど、神に対する愛と、神に関する知識とが増えてくる。
- (10) やがてその人は、キリストにある成人として立てるようになる。
- (11) その人は、自分が神のうちにいることを知るようになる。
- (12) グノーシス主義者ではなく、神の命令を守る人こそ真の「知識」を持つ。

「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません」(2:6)

- (1) 神と交わりを持っていると言う人は、キリストを手本として歩まねばならない。
- (2) メシアとして行った奇跡の業は、私たち人間が真似るべきものではない。
- (3) 「キリストが歩まれたように歩む」とは、愛の実践に生きるということ。

- (4) その愛は、もしそうする必要があるなら、自分を犠牲にしても兄弟たちを愛する愛である。

2. 兄弟愛によるテスト (2：7～11)

「愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いているではありません。むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです」(2：7)

- (1) ヨハネが古い命令と言っているのは、「互いに愛する」ということ。
- (2) グノーシス主義者たちは「新しい知識」を誇り、ヨハネは「古い命令」を誇る。
- (3) 確かにこれは、古い命令である。
 - ①レビ 19：18、33～34に見られる命令。
 - ②信者は、福音を信じた最初の時から、この命令を聞いていた。
- (4) 主イエスは、これを新しい命令と言われた。

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。…」(ヨハ 13：34～35)

 - ①この命令の新しい要素は、「わたしがあなたがたを愛したように」という部分。

「しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとっても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです」(2：8)

- (1) ここでは、ヨハネはその古い命令を「新しい命令として書き送る」と言っている。(2) 信者が互いに愛し合いながら生きている所では、まことの光が輝き出し、やみが消え去る。

「光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまりくことがありません。…」(9～11 節)

- (1) 兄弟(兄弟姉妹のこと)を憎む者とは、具体的にはグノーシス主義者たちを指す。
 - ①彼らは兄弟たちを見下し、その交わりから離れて行った。
 - ②それによって、彼らがやみの中を歩んでいることが明らかになった。
- (2) 兄弟を愛する者は光の中にいるので、自分に対しても、兄弟たちに対しても、つまりきを置くようなことはない。

3. 挿入句としての説明 (2：12～14)

「子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。父たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです」(2：12～13)

- (1) ヨハネは、この手紙を書いている理由を説明する。
 - ①愛の命令を書いているのは、読者たちがなんらかの霊的体験をしたからである。
 - ②霊的体験の深さに応じて、①子どもたち、②父たち、③若い者たち、に3区分。
- (2) 子どもたち
 - ①救われたばかりの人たち、霊的幼子たちのこと
 - ②「主の御名によって」(イエスを信じる信仰によって)、罪の赦しを体験した。
 - ③クリスチャン生活の最初に経験するのは、罪の赦しとそこから来る喜びである。
 - ④その喜びの体験をした人たちに、信者としていかに生きるべきかを書いている。
- (3) 父たち
 - ①信仰体験が長く、霊的に成熟した人たち
 - ②神が憐れみと愛に富んだお方であることを十分に体験し、そのお方が永遠の昔からおられる神であることを理解した人たち
- (4) 若い者たち
 - ①霊的成長の途上にいる人たち
 - ②彼らは活発に伝道し、日々信仰の戦いを戦っている。
 - ③悪い者(この世の支配者。Ⅱコリ4:4)に勝利するという体験をしている。

「小さい者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが御父を知ったからです。父たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです」(2:14)。

- (1) ヨハネは再度ほぼ同じような励ましを語っている。
- (2) 小さい者たち
 - ①イエスを信じる信仰によって父なる神を知るようになった人たち
- (3) 父たち
 - ①神こそがすべての根源であることを知った。
- (4) 若い者たち
 - ①神のみことばに留まることによって、悪魔との戦いに勝利した。

4. 霊的戦いによるテスト (2:15~17)

「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません」(2:15)

- (1) 「世」とは、サタン(悪魔)の支配下にあるこの世のシステムや価値観のことで、その本質は神に敵対するものである。
- (2) もし世を愛しているなら、その人のうちには御父に対する愛はない。
- (3) それどころか、「世を愛することは神に敵すること」(ヤコ4:4)になる。

「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです」(2:16)

- (1) 信者が経験する霊的戦いの領域は3つある。
 - ①「肉の欲」、「目の欲」、「暮らし向きの自慢」(生活のおごり)
- (2) 主イエスは荒野で、サタンからこの3つの領域において誘惑を受けた。
 - ①イエスは申命記から聖句を引用し、サタンを撃退された。
- (3) 私たち信者も、この3つの領域で試みに会う。
 - ①イエスが聖句を引用し、それに従われたことは、私たちへの教訓となる。
 - ②霊的戦いを複雑にしてはならない。

「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます」(2:17)

- (1) かつては、「肉の欲」、「目の欲」、「暮らし向きの自慢」によって支配されていた。
- (2) クリスマンとなり、これらのものはやがて滅び行く運命にあることを知った。
- (3) なぜなら、これらのものは神から出たものではないから。
- (4) 「神のみこころを行なう者だけが、いつまでもながらえます」
- (5) 私たちの内にこの世に固執している部分があるなら、サタンはそこを攻めてくる。

5. 教理によるテスト (2:18~27)

「小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であることがわかります」(2:18)

- (1) 「終わりの時」とは、神の人類救済計画の最後の段階という意味
 - ①ヨハネは、いつその時が終わるかについては語っていない。
- (2) ヨハネは、将来現れる反キリストと、すでに存在している多くの反キリストとを区別している。
- (3) 反キリストとは、誤った教理を広めている人たちのこと。
- (4) 多くの反キリストの出現は、今は終わりの時であることを証明している。
 - ①キリストご自身の教え(マタ 24:4~5、ルカ 21:8)
 - ②パウロの手紙(IIテサ 2:3)

「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです」(2:19)

- (1) ヨハネが「反キリスト」と呼んでいる人たちは、信者の交わりから出て行った。
- (2) 正しい教理に留まることができないのは、最初から救われていなかった証拠。

「あなたがたには聖なる方からのそそぎの油があるので、だれでも知識を持っています」
(2:20)

- (1) イエスを信じた瞬間、私たちの内側には聖霊が与えられる。
- (2) 聖霊の内住は、私たちが救われていることの証拠である。
- (3) と同時に、聖霊は私たちが誤った教理に引かれて行くことのないように、私たちのために予防的働きをし、私たちを助けてくださる。
- (4) 真理を明らかにするので「真理の御霊」と呼ばれる(ヨハ14:17、26、16:13)。
- (5) 日々聖霊の声に聞き従っているなら、偽教師の教えに惑わされることはなくなる。

「このように書いて来たのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからであり、…。偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。…」(2:21~23)

- (1) ヨハネがこの手紙の中で反キリストに言及している理由は、読者たちが真理(三一体の神、そして福音)を知らないからではなく、すでに知っているから。
- (2) ヨハネはその真理を思い出させ、信仰が成長するための助言を与えようとする。
- (3) 偽り者(反キリスト)の共通した特徴は、キリストの受肉の否定と、キリストの神性の否定である。
- (4) 彼らは、キリストの父が旧約聖書の神であることも、キリストが神の子であることも否定していた。
- (5) 御子の受肉や神性を拒否するなら、その人は父なる神とはなんの関係もない。
- (6) 一方、イエスを神の子(メシア)として受け入れる者は、父なる神との交わりに入れられる。

「あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。それがキリストで自身の私たちに与えになった約束であって、永遠のいのちです。…」
(2:24~26)

- (1) グノーシス主義のような新しい教えに振り回されてはいけない。
- (2) 初めから聞いたこと(福音のことば)を心に留まらせることが大切。
- (3) そうすれば、私たちは御子と御父のうちに留まるのである。

「あなたがたの場合は、キリストから受けたそそぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。…」(2:27)

- (1) 再度聖霊について書いている。
- (2) 「だれからも教える必要がありません」とは、全く教えてもらう必要がないという意味ではない。
- (3) これは、偽教師から教えてもらう必要がないという意味か、信仰の基本については教えてもらう必要がないという意味かのいずれかである。

6. 実践によるテスト (2:28~29)

「そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現れるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入ることのないためです」(2:28)

- (1) ここで「子どもたちよ」と呼びかけ、再び信者全体に語っている。
- (2) 「キリストのうちにとどまる」とは、キリストに信頼を置き、キリストを愛し、キリストにあって希望を抱き続けること。また、キリストの福音を信じ続けること。
- (3) そういう人は、キリストの来臨(再臨)の時に御前で恥じ入ることがなくなる。
- (4) 今キリストは、信者の目からは消えているが、天にあって私たちのために執りなしをしておられる。
- (5) やがてキリストは、その約束通りに地上に戻って来られる。
- (6) その時、救いの確信をもってキリストの御前に出ることのできる人は幸いである。
- (7) そういう人は、恥を見ることもなく、自らを恥じることもない。

「もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、義を行う者がみな神から生まれたこともわかるはずですよ」(2:29)

- (1) 神は正しい方。この部分は、「御子が正しい方だと知っているなら」(新共同訳)という訳も可能。信者であるなら、キリストが正しいお方であることを知っているはず。
- (2) そのお方から生まれた者は、義を行うようになる。
- (3) それによって、その者が霊的に新生していることが分かる。
- (4) 「義を行う」とは、神の要求を満たすために外面的に何かをすることではない。
 - ①そういう人は、業による救いを追及しているのである。
 - ②「義を行う」とは、キリストの愛と恵みに感動し、愛と従順によってキリストに応答すること。
 - ③愛の動機で義を行っている人は、自分が霊的に新生し(神から生まれ)、救われていることを確信することができる。

III. 愛に留まることによる確信 (3:1~4:21)

1. 聖い歩みによる確信 (3:1~10)

「私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです——御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです」(3:1)

- (1) 信者は、父なる神がどれほどの犠牲を払ってくださったかを知っている。
- (2) そういう信仰を持っている人は、自らの生活を清くするように努力する。
- (3) この世は、信者を認めず評価もしない。罪人は父なる神を知らないからである。

「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっていきます。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします」(3:2~3)

- (1) 将来自分がどのような姿になるのかは分かっていない。
- (2) それが明らかになるのは、キリストの再臨の時。
- (3) 私たちはキリストの栄光の姿を目撃し、その姿に似た者に変えられる（パウロは、ロマ8:18~30でこの真理について詳細に論じている）。
- (4) この望みを抱く者は、日々の生活において自分を清く保つ努力をする。

「罪を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです」(3:4~6)

- (1) 新生体験をする前の人は、習慣的に罪を犯している。
- (2) キリストのうちに留まる者は、習慣的な罪を犯さなくなる。
- (3) もし罪を犯した場合は、告白によって赦しを受けることができる(1:9参照)。
- (4) もし習慣的に罪を犯すなら、その人はキリストを知ってはいない。
- (5) 罪を犯さなくなる秘訣は、「キリストのうちにとどまること」。

「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません」(ヨハ15:4)

「子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです」(3:7)

- (1) 「だれにも惑わされてはいけません」は、グノーシス主義者を意識してのこと。
- (2) 彼らは、肉体における行為は、霊に影響を与えることはないと主張していた。
- (3) 「義を行う者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです」とは、業

による救いを説いたものではない。人は信仰により、恵みによって救われる。と同時に、救われた人は義を行うようになる。

「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」(3:8)

- (1) 義を行う者(習慣的に義を行う者)は神から生まれた者であるが(7節)、罪を犯す者(習慣的に罪を犯す者)は、悪魔から出た者である。
- (2) ヨハネは、悪魔から「生まれた」とは言わない。悪魔は生むことができない。
- (3) 罪人は、悪魔を真似て「悪魔の子」となる。
- (4) 神の子イエスは、「悪魔のしわざ」を打ちこわすために来られた。
- (5) 「悪魔のしわざ」とは、罪であり、その結果としての死である。
- (6) イエスを信じる者は、イエスが打ち打ちこわすために来られたもの(罪のこと)を行うことができないはず。

「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです」(3:9~10)

- (1) 悪魔の子と神の子のライフスタイルは、対照的である。
- (2) 神の子は、罪を犯さない(習慣的に罪を犯すことがないという意味)。
- (3) 「神の種」(新生したいのちの原則)が神の子の中に留まっているから。
- (4) 神の子どもと悪魔の子どもの区別は、義を行うかどうかにある。
 - ①義を行わない者は、悪魔から出た者。
 - ②兄弟(信仰の兄弟姉妹)を愛さない者は、義を行っていない。
 - ③そういう人は、神の子とは呼べない。
 - ④なぜなら、神から生まれたなら、兄弟を愛しなさいという命令に従うはず。

2. 兄弟愛による確信(3:11~18)

「互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。カインのようであってははいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行いは悪く、兄弟の行いは正しかったからです」(3:11~12)

- (1) 真の信者は、互いに愛し合うという特徴を持っている。
- (2) その特徴は、悪い者(サタン)から出た者であるカインの特徴とは異なる。
- (3) 真の信者は、思いにおいても行動においても、兄弟を憎んではない。

「兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません」(3:13)

- (1) カインは兄弟でさえも憎み、その憎しみは殺人に至るまでに激しくなった。
- (2) それなら、真の信者たちがこの世の者たちから憎まれても、驚くべきではない。
- (3) 信者たちがこの世から呼び出されたこと、そして、互いに愛し合っているということのゆえに、この世は信者たちを憎む。

「もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです」(ヨハ 15:18~19)

「私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです」(3:14)

- (1) 自分が新生し救われていることは、兄弟たちを愛していることで分かる。
- (2) 「私たち」という言葉に強調点がある。つまり、世は私たちを憎んだとしても、私たち自身は、自分が霊的死から霊的いのちに移ったことを知っているというのだ。
- (3) 兄弟愛があることが救いの条件ではない。兄弟愛は、救いの結果である。

「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです」(3:15)

- (1) 兄弟愛に欠ける人(兄弟を憎む者)は、救われていない。
- (2) その人の心には「人殺しの性質」が宿っている。それゆえ「人殺し」と呼ばれる。
- (3) 神は外面的行為だけでなく、内面まで問題にされる。
- (4) 同じ教えが、すでに2章9節に出ていた。

「光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです」

- ①その文脈では、「兄弟を憎む者」とは、グノーシス主義者たちを指していた。
- ②彼らは信者の交わりから離れて行き、やみの中を歩んでいることを証明した。
- (5) 光と闇とが交わることは、絶対にない。

「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです…」(3:16~17)

- (1) イエスは、ヨハ 10:11 でこうお語りになった。
「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」
- (2) ヨハネは同じ言葉を使い「ご自分のいのちをお捨てになりました」と書いた。
- (3) ヨハネは、イエスのことば、行動、そして十字架の死を鮮明に記憶していた。
- (4) イエスの死によって、私たちに愛が分かった。

- (5) この愛は、無条件の愛、愛する価値のない者を愛する愛、アガペの愛である。
- (6) ここでも、「私たち」という言葉が強調されている。
 - ①私たちはキリストの愛を体験したのだから、その手本に従うべきである。
 - ②その手本に従うとは、自己犠牲の愛に生きること。
- (7) 兄弟が困っているのを見ても助けようとしないのは、愛に欠けることである。

「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか」(3:18)

- (1) その人に真実な愛があるかどうかは、言葉ではなく行動によって証明される。
- (2) ヨハネは、優しい言葉や励ましに満ちた言葉を否定しているのではない。
- (3) 私たちが覚えるべきことは、「行為は言葉よりも雄弁である」という真理。

3. 心の状態による確信 (3:19~24)

「それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです」(3:19)

- (1) 真実な愛があるなら(18節)、私たちは心に平安を宿すようになる。
- (2) それによって、自分が死から命に移ったことを確信するようになる。
- (3) 「真理に属する」とは、救われていることと同義。
- (4) この状態は、理屈の世界から体験の世界への移行である。
- (5) この平安は「御前」にあって与えられるもの。
 - ①神は全知全能で、私たちの内面をすべてご存知のお方。
 - ②その神の御前で平安をいただけるとは、なんという幸いか。

「たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです」(3:20)

- (1) 私たちがいかに努力しようとも、地上生涯においては完璧になれるわけではない。
- (2) 愛の人になればなるほど、自分の欠点が見えてくる。
- (3) しかし、心配する必要はない。
 - ①神の心は私たちの良心よりも大きく、神は私たちの心のすべてをご存じだから。
 - ②神は私たちが過去に犯した罪も、今の状態も、将来の状態もすべてご存知。
 - ③罪を隠すことによって平安を得ることはできない。
 - ④平安を得る唯一の方法は、神の恵みを信じる「信仰」である。

「愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの

御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです」(3:21~23)

- (1) 心に平安があるなら、神から答えがいただける祈りが可能になる。
- (2) 祈りに対する答えが返って来ることは、救いの確信につながる。
- (3) 祈りの答えは、次の3つのことを実行している人に与えられる。
 - ①キリストを信じている人
 - ②神の命令を守ろうとしている人
 - ③兄弟愛を実践している人
- (4) もし神の御心に反する祈りをしたとしても、その人は最後には自らの思いを神に委ね、神の御心を優先させる。

「神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るのです」(3:24)

- (1) 私たちがキリストにあって神とつながっていることを証明する究極的な証拠は、聖霊の内住である。
- (2) 聖霊によって、神は私たちのうちに留まり、私たちは神のうちに留まる。
- (3) 救いの確信は、結局のところ、私たちのうちにおられる聖霊によるものである。
- (4) 聖霊の内住は、ある特定の人だけに与えられるものではなく、信じたすべての人に与えられる特権である。
- (5) 聖霊の内住があるので、私たちは神の御心を行う意欲と力を持つ。また、人格はキリストに似た者に作り変えられて行く。

4. 教理による確信 (4:1~6)

「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです」(4:1)

- (1) 「愛する者たち」とは、読者の注意を喚起するための愛の呼びかけ。
- (2) 神からの啓示を受けたと主張する人がいても、むやみにそれを信じてはいけない。
- (3) むやみに信じてはいけない理由は、偽預言者が多く現れたから。
- (4) 偽預言者とは、グノーシス主義者（霊肉二元論）やケリントス主義者（仮現論）。

「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に來ているのです」(4:2~3)

- (1) 霊（預言者、教師）を吟味する方法は、イエス・キリストを正しく告白しているかど

うかである。

- (2) 人となられたキリスト（神の子）は、私たちの罪のために死なれた。
 - ①神なら、死ぬことはできない。
 - ②イエスはその死によって、私たちに対する愛を明らかにされた。
- (3) イエスの受肉を否定するなら、罪人に対するイエスの愛を否定したことになる。
- (4) 「イエスを告白しない霊」とは、神の子イエスの受肉を否定する教えのこと。
- (5) それらの霊（預言者、教師）は、神から出たものでないばかりか、反キリストの霊である（すでに 2：18～25 に出ていた）。

「子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです」（4：4）

- (1) 「あなたがた」という言葉に強調がある。
- (2) イエスが人として来られたキリストであることを告白している人たち。
- (3) 「彼ら」とは、偽りの教えを信奉している人たち。
- (4) 信者の心の中におられる神は、この世を支配している悪魔よりも力あるお方。

「彼らはこの世の者です。ですから、この世のことばを語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾けます。私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出していない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分けます」（4：5～6）

- (1) イエスを信じない者たちは、この世の者である。
 - ①罪人としての性質を持ち、すべてのことをこの世の基準で判断する。
 - ②彼らは同じ価値観に立っているので、互いに受け入れ合うことができる。
 - ③しかし彼らは、神から出た者たちの言葉を聞こうとはしない。
- (2) 真理の霊と偽りの霊とを見分ける方法は、単純である。
 - ①神から出た言葉（イエスは受肉したキリストである）に耳を傾ける人は、神を知っている人。
 - ②耳を傾けない人は、偽りの霊から出ている人。

5. 愛の関係による確信（4：7～12）

「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています」（4：7）

- (1) 愛のテーマが再度出てくる。
- (2) 愛は、義の集大成である（2：29 参照）。
- (3) 神の基本的な性質は、愛である。愛は神から出ている。
- (4) 互いに愛し合うべき理由は、私たちが愛なる神を信じ、その神に従っているから。
- (5) 兄弟愛を持っているということは、霊的に新生している証拠である。

- (6) 兄弟愛を持ったから救われたのではなく、愛なる神を知ったから兄弟愛を実行することができるようになった。

「愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです」(4:8)

- (1) この聖句は、3段論法で理解することができる。
- ①愛さない人は、愛を知らない。
 - ②神は愛である。
 - ③従って、愛さない人は、神を知らない。

「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです」(4:9)

- (1) ヨハネはその福音書の中で、すでに神の愛について記していた。
- 「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハ3:16)
- (2) 遣わしたお方は父なる神であり、遣わされたお方は子なる神（ひとり子、かけがえない子）である。
- (3) ひとり子が遣わされた先は、「世」である。
- (4) イエスの十字架上の死は、私たちに「いのち」を得させるためのものであった。
- (5) イエスの犠牲の大きさは、そのまま神の愛の大きさにつながる。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」(4:10)

- (1) もし私たちの方から先に神を愛していたとするなら、神が私たちを愛してくださることを期待することができたのかもしれないが、事実はそうではない。
- (2) 私たちは神を拒絶し、罪の中を滅びに向かって歩んでいた。つまり、愛される理由も価値もなかったということ
- (3) その私たちを、神が先に愛してくださった。
- (4) 罪の問題を解決したのは、「なだめの供え物」としての御子の死であった。
- (5) 神の愛は、哲学的思索ではなく、行動を通して表現された。

「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです」(4:11)

- (1) 神の愛を体験した者（神から生まれた者）は、強制されてではなく、自発的に、対等な存在である兄弟姉妹たちを愛するようになるはず。
- (2) 愛とは、相手の最善を願うこと。

- (3) その愛を持っているかどうか、神の愛を体験したかどうかの証拠となる。

「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにあられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです」(4:12)

- (1) 肉の目では神は見えない。
「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」(ヨハ1:18)
- (2) 目に見えない神をどのように認識したらよいのか。
①一つの方法は、イエス・キリストを見上げること。
②もう一つの方法は、互いに愛し合うこと。
- (3) 「神の愛が私たちのうちに全うされる」とは、神に対する私たちの愛は、目に見える兄弟姉妹たちを愛することによって表現されるという意味。
①決して、私たちの愛が完全なものになるということではない。
②私たちが完全にされるのは、天においてである。
③目に見える兄弟姉妹を愛さないなら、目に見えない神を愛していることにはならないというのが、ここでの意味である。

6. 教理による確信 (4:13~21)

「神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにあられることがわかります」(4:13)

- (1) 救いのもうひとつの証拠は、私たちの内におられる聖霊である。
- (2) 主イエスは、ご自分がいなくなった後、聖霊を遣わすという約束をされた(ヨハ14:16、17、26、15:26、16:7など参照)。
- (3) 今はその約束が成就している時代である。
- (4) 聖霊の影響を受けた人は、次のような御霊の実を付けるようになる。
「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません」(ガラ5:22~23)
- (5) 自分の人格が聖霊の感化を受けているのを実感することは、救いの確信につながる。

「私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにあられ、その人も神のうちにいます」(4:14~15)

- (1) 「私たち」というのは、使徒たちのこと。
- (2) 彼らは、神の子が人として来られ、地上生涯を歩まれたことを目撃した。
- (3) 使徒たちの教えは体験に基づいたものであり、後代の信者たちにはその内容に変更を加えることは許されていない。
- (4) クリスマンになる条件は、「イエスを神の御子と告白する」ことである。

- (5) 単なる口先だけの告白ではなく、心から、真実に、告白する必要がある。

「私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにあり、神もその人のうちにおられます」(4:16)

- (1) ヨハネの文章の特徴は、重要なテーマを繰り返すということ。
- (2) すでに何度も出て来た「愛」のテーマが繰り返されている。
- (3) 神の愛を体験した者は、自分自身が兄弟愛に生きようになる。
- (4) そのことによって、その人が神のうちにあり、神もその人のうちにいることが明らかになる。

「このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです」(4:17)

- (1) 「愛が私たちにおいても完全なものとなりました」とは、私たちの愛が完成したという意味ではない。私たちの愛が、神が意図された形を取ったということで、その愛は成長していかなければならない。
- (2) 愛の成長によって、私たちは救いの確信を深め、それにつれて、さばきの日に神の前に立つことへの恐れが取り除かれるようになる。
- (3) 罪人は神のさばきを恐れながら生きているが、私たちはそうではない。
- (4) 今キリストは天におられ、私たちはこの世にいる。この世にいる私たちは、天におられるキリストの姿に似た者に変えられつつある。
- (5) 信仰の成長の過程を確認しよう。①イエスを救い主として信じる信仰によって救われる。②救われた人は、神との交流の中に生き、愛を実践するようになる。③愛の実践は、救いの事実を深く確信させてくれる。④その確信は、私たちの心からさばきへの恐れを取り除く。

「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです」(4:18~19)

- (1) 神の愛にとどまり、神との関係において成長する人は、恐れから解放される。
- (2) その恐れとは、神の裁きに会うことを考えた時に感じる恐れである。
- (3) クリスマンとして成長すればするほど、裁きに対する恐れから解放される。
- (4) なぜなら、自分の罪は赦されているという確信が深まるから。
- (5) 神を知らない人はそうではない。
- (6) その人たちは、良心の痛みによって、裁きの日に下る刑罰を予感している。
- (7) 彼らが刑罰を恐れるのは、神の愛を知らず、また愛の人となっていないから。
- (8) しかし、私たちクリスマンは神を愛し、隣人を愛している。

(9) そうなれた理由は、先ず神が私たちを愛してくださり、私たちがその愛を知ったから。

「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています」(4：20～21)

- (1) 神を愛すると言いながら、目に見える兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者。
- (2) 人間は神の「かたち」に造られている。その人間を愛することができないなら、目に見えない神を愛することは不可能。
- (3) 神を愛する人は、愛の対象であるお方の命令に聞き従う。
- (4) 再度言うが、救われるために愛を実行するのではない。愛の生活は、霊的に新生した結果起こること。そして、愛を実行する人は、救いの確信を自分のものとすることができる。

IV. まとめ (5：1～21)

1. 救いの確信 (5：1～5)

「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します」(5：1)

- (1) 救いの確信は、イエスをキリスト（メシア）と信じる信仰の告白から生まれる。
- (2) 救いの確信は、神への愛によって証明される。
 - ① 神から生まれた者は、神を愛するようになる。
 - ② その愛によって、自分が救われていることを確信するようになる。
- (3) さらに、兄弟姉妹（神によって生まれた者）をも愛するようになる。
 - ① 兄弟愛を実践していることが、神への愛を持っていることの証拠となる。

「私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません」(5：2～3)

- (1) 1 節で確認した真理が教えられている。神への愛と兄弟たちへの愛が、救いの確信を生み出す。
- (2) 神を愛するとは、神の命令を守ること。
- (3) 神の命令は重荷とはならない。

「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」(マタ 11：30)

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」(ヨハ 8：32)

「なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です」(5:4)

- (1) 神を愛する者は、神によって生まれた者であり、その信仰によって世に打ち勝つ。
- (2) 「世」とは、神の教えや価値観に敵対するすべての力を指す。
- (3) この勝利は継続的な勝利である。世に対する格闘は生涯続く。
- (4) 世に勝つための武器は、信仰である。
- (5) 「世に打ち勝った勝利です」という部分は、継続的勝利ではなく、すでに起こった事実を述べている。信仰による勝利はすでに確定した事実である。

「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか」(5:5)

- (1) 「世に勝つ者とはだれでしょう」との問いかけによって、次に来る宣言が際立ったものとなる。
- (2) 世に勝つ者は、「イエスを神の子と信じる者」である。
- (3) イエスこそすでに世に打ち勝たれたお方である。
- (4) イエスは人であり、同時に神の子（神ご自身）でもある。これこそ使徒たちが伝えた正統的な信仰である。

2. 救いを証しするもの (5:6~13)

「このイエス・キリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られたのです。そして、あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです」(5:6)

- (1) 「水と血によって来られた」という意味は、ふたつ考えられる。
 - ①神の子イエスは確かに人間として来られた。
 「しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た」(ヨハ 19:34)
 - ②イエスの公生涯はバプテスマのヨハネからバプテスマを受けるところから始まり、十字架の死で終わった。この解釈の方が妥当。
- (2) イエスが神の子であることを証しするのは、御霊である。
 - ①イエスがバプテスマを受けた際には、御霊が鳩のように下った。
 - ②御霊は公生涯の間、イエスが神の子であることを証言された。

「あかしするものが三つあります。御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです」(5:7~8)

- (1) 「あかしするもの」とは、イエスが神の子であることを証明するものという意味。
- (2) モーセの律法では、2人ないし3人の証言によって、真実が認定される。
- (3) イエスの神性を証明する3つの証拠

- ①御霊は、イエスのバプテスマの際に、イエスの上に下った（ヨハ 1：32～34）。
- ②水は、バプテスマを受けた時の水である（マタ 3：13～15、マコ 1：9～11）。
- ③血は、イエスが十字架上で流された血である（マコ 15：37～39）。

「もし、私たちが人間のあかしを受け入れるなら、神のあかしはそれにまさるものです。御子についてあかしされたことが神のあかしだからです」（5：9）

- (1) 私たちの生活は「人間のあかし」を受け入れることによって成り立っている。
- (2) 人間よりもはるかにまさる神ご自身のあかしを受け入れるのは当然のこと。
- (3) 御霊と水と血は、イエスが神の子であることを示す「神のあかし」である。
- (4) この「神のあかし」を受け取っていることは、救いの証拠となる。

「神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです」（5：10）

- (1) 「神の御子を信じる者」とは、イエスがキリストであることを信じ、永遠の滅びから永遠のいのちに移った者のこと。その人の心には聖霊の内住があり、その聖霊によって自分が救われていることを深く確信するようになる。
- (2) 「神を信じない者」の状況は悲惨。その人は、イエスがキリストであるという神のあかしを受け入れない。それは、神を偽り者とする行為である。
- (3) その人が救いを得ているかどうかの判断基準は、単純である。イエスが神の子でありキリストであると信じている人は、救いを得ている。その信仰が、救いの証拠である。一方、神を信じない人は、その不信仰によって救われていないことを証明している。

「そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません」（5：11～12）

- (1) 神のあかしを要約すると、「神が私たちに永遠のいのちを与えられた」ということになる。単純だが、実に深遠で恵みに満ちた宣言である。
- (2) 私たちに永遠のいのちが与えられている理由は、御子のうちにいのちがあるから。
「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった」（ヨハ 1：4）
- (3) 御子を信じた者は、御子のいのちを体験するようになる。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」（ヨハ 5：24）

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです」（5：13）

- (1) ヨハネはその福音書でも、最後に執筆目的を記している。

「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」(ヨハ20:31)

- (2) この書簡でも同じことをしている。
- (3) ヨハネの福音書は、どうすれば永遠のいのちを得ることができるのかについて記している(イエスの御名によっていのちを得る)。
- (4) この手紙は、イエスを信じた人は、すでに永遠のいのちを持っているのだという確証を与えてくれる。

3. 確信と答えられた祈り (5:14~17)

「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです」(5:14~15)

- (1) 答えられた祈りは、救いの確証につながる。
- (2) その場合、「神のみこころにかなう願いをする」というのが重要なこと。
- (3) 「私たちの願うことを神が聞いてくださる」というのは、正しい教理である。
- (4) その教理から、「神に願ったその事は、すでにかなえられたと知る」という確信が生まれる。
- (5) ただし、祈りの答えがすぐに来るとは限らない。神は最善の時に、最善の方法で、最善のことを為してくださる。

「だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。死に至る罪があります。この罪については、願うようにとは言いません。不正はみな罪ですが、死に至らない罪があります」(5:16~17)

- (1) すべての罪は、究極的には死に至るものである。
- (2) しかし、ほとんどの罪は、悔い改めによって赦しを受けることができる。
- (3) 「死に至らない罪」とは、罪を犯してはいるが、教会の交わりの中に留まっている人の場合を言う。
- (4) 「死に至る罪」とは、教会の勧告を受け入れなかったために除名された人のこと。
- (5) そのような人が悔い改めに至ることは難しいので、執りなしの祈りはしなくてもいいというのである。もちろん、そのような人のために祈ることを禁止しているのではない。

4. 体験的知識 (5:18~21)

「神によって生まれた者はだれも罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守っていてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。私たち

は神からの者であり、世全体は悪い者の支配下にあることを知っています」(5:18~19)

- (1) 真の信者は、聖霊によって新生体験をした。その人の内には新しい命が宿っており、その人は神の性質に与る者とされた。
- (2) そういう人は、習慣的な罪からは解放されている。
- (3) 真の信者には「神から生まれた方」(キリストのこと)からの守りがある。
- (4) その結果、「悪い者」(悪魔)は私たちに触れることができない。
- (5) 信者は神に属し、この世は悪魔に属している。これらのことを、私たちは体験的に知っている。

「しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(5:20)

- (1) 私たちが福音を理解し、真の神を知るようになったのは、キリストが私たちに理解力を与えてくださったから。
- (2) その結果、私たちは御子イエス・キリストのうちにいるようになった。
- (3) このキリストこそ、「まことの神、永遠のいのち」である。キリストを知ったことは、真理を知ったことであり、永遠のいのちを知ったことである。

「子どもたちよ。偶像を警戒しなさい」(5:21)

- (1) これがこの手紙の最後の勧告。
- (2) 信者たちは、偶像礼拝者で満ちている社会に住んでいる。
- (3) キリストに留まることを忘れた瞬間から、偶像礼拝の悪影響を受けることになる。
- (4) この手紙の文脈では、「偶像」の中には、使徒たちの教えとは異なる異端的教えも含まれる。むしろ、それが第一義的な意味なのかもしれない。神よりも大切にしているものがあるなら、それが偶像礼拝である。



無断複製・転載を禁じます